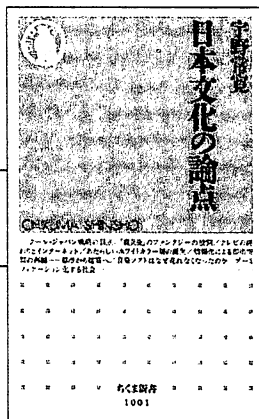


宇野氏は、「日本独自の発展」を遂げているサブカルチャーを、「夜の世界」と名付け、その存在の大きさを指摘する。そして、「奇跡の復興を遂げ、それ故に制度疲労を起こし、ゆるやかに壊死しつつある高齢国家日本」を、「昼の世界の姿にすぎない」と述べる。「陽の当たらない夜の世界」こそ、革新と創造性を生み出してきたというのだ。

国家的にも「クールジャパン」として、ACG（アニメ、コミック、ゲーム）の輸出が重視される今日、生徒にとつての「夜の世界」の存在をわれわれも認識する必要があることは確かだろう。

後半では、「西洋近代のものとは異なった原理で駆動する新しい世界」の象徴として、AKB48を取り上げる。劇場公演、握手会、選抜総選挙、じゃんけん大会といったシステムの意味を吟味し、資本主義によって人間の想像力が画一化するどころ



日本文化の論点

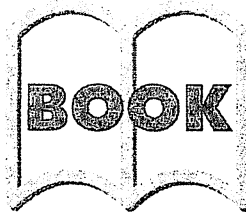
宇野常寛 著
756円 ちくま新書
☎03-5687-2680

か、欲望が多様化し、変化したと評価する。

しかし、生徒の想像力、創造力は、本当に育ってきたのか。

教育は、従来の文化を伝承するだけでなく、新たな文化を創出する営みでもある。サブカルチャーは、「サブ」という名の通り、現在の支配的文化に対する単なる「下位の文化」とどまる恐れもある。望ましい文化創出のためには、連帯や共同などの教育的価値を

伝えるとともに、社会の現状に問題意識を持ち、これに対抗する文化（カウンターカルチャー）の担い手を育成する必要があるのではない。東日本大震災後、人々の絆や地域の重要性等の若者の認識は高まっているはずである。ただし、押し付けで文化は育たないことはいまでもない。（聖徳大学教授・西村美東士）



ブック